

阿部真大著『居場所の社会学～生きづらさを超えて』日本経済新聞出版社、2011年

本書を書評に選んだのは、著者が“居場所”の重要性に着目していたからである。

私自身は、社会の中で生きていく上で、自らの居場所を見つけることはきわめて重要なことだと考えてきた。そして、自分の居場所のない状態こそが、社会で生きていくこと上での根源的不安と理解してきた。そのためどのようにして居場所を見つけて確保するか、この点に着目した本書に期待し書評に取り上げることとした。

著者及び本書の問題意識の出発点は、セーフティネットの確保において、「物質的、金銭的な側面も大事だが、居場所の問題も大事である」というものである。そして、「居場所づくりの実践は、社会的に排除された人々を再び社会の中に戻していく“社会的包摂”の実践である」と考えている。

本書において、セーフティネットのために居場所の確保が必要とされる人々として、定年退職者、高齢フリーター、学生、非正規労働に従事する若者、就活失敗者、ヤンキーが事例としてあげられている。定年退職後の居場所、濃密な人間関係を望まない人の居場所、職場に居場所を作れない人に対するコミュニティ内の居場所をどのように作るのか。

著者は、こうした人々を対象に、職場における居場所確保の方法から、職場で不十分な場合の職場外の居場所確保の必要性を訴えている。また、現在非正規労働にも従事していない人に対しては、フリーター就労経験により、居場所のない状況を理解し認識する機会を持つことを提案している。

彼自身の経験に裏打ちされた居場所に関する命題のいくつかを例示すると、(1)だれかと一緒にいるからといって、居場所があるわけではない、(2)ひとりでいることはスティグマ化することもある、(3)居場所の拡張は間違えることもある、(4)過剰適応はよくない、(5)まわりとのコンフリクトを解決していくなかで新しい居場所はできる、などがあげられる。そして、命題の実例として第1章で、男性定年退職者のケア職場における就労実現の問題について説明している。

本書は、居場所および居場所確保の視点から、社会における様々な問題とその解決方法を整理してみせたといえる。その整理の仕方はきわめてユニークである。

このように、多くの命題と具体的なアイデアが提示されているが、紹介された具体的な事例においても、必ずしも居場所の確保というハッピーエンドに終わらないことも多い気がした。各種命題の理念性が高いため（曖昧なため）事例適用において、例外条件を多数つけざるを得ないと思われるからである。紹介した第1章の女性を中心のケア労働職場では、「男が変わって、職場も変える」ためには、職場のコンフリクトの存在やコミュニケーターの配置だけでなく、何よりも男性定年退職者の成熟した人間性を必要とすると思われるからである。

また、提示された解決方法は、すべて「居場所を確保すること」と結びついているが、その具体的な解決方法はこれまで多くの人が指摘し提言してきたものである。問題の複雑さに入り込めば入り込むほど、「居場所」理論および命題の説明力と解決力は薄れ、理論よりも困難な現実が残る結果となったように思われる。

しかし、社会的弱者に限らず、社会で生きていく上で居場所の確保という視点は重要で、こうした視点から問題を整理し、解決の方向を探っていくことは望ましいことと思われる。最後に、本書はポップカルチャーの独自の解釈など、面白く拝読させて頂いた点が多かったことを付け加えておきたい。（西村博史）